近代日本における
産業・労働の展開とジェンダー

横山百合子・樋浦郷子

1　小特集にあたって―共同研究の概要―

本特集は，2019 年度から 2021 年度にかけて実施した歴博基幹研究「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」の成果を報告するものである。

近代日本は，明治維新以降，新たに成立した国家体制と国際環境のもとで急速に近代化を遂げてきた。同時に，明治維新に続く産業革命，20 世紀の重工業化にいたる過程は，産業および労働分野でのジェンダーの構築を不可避的に伴うものであった。本研究は，このような産業と労働という経済的側面から近代日本におけるジェンダーの構築と変容の過程を明らかにすることを目的とする。研究にあたっては，近世からの移行，および現代社会への連接を意識し，対象とする時期を 19 世紀中葉から高度成長期までと比較的長く設定し，産業化にともなう男女の労働の変容をジェンダーの視点から捉え直し，新たな歴史像の構築を目指した。

メンバーと研究会開催の概要は次のとおりである。共同研究の代表は 2020 年度末まで横山百合子が，2021 年度は吉井文美と樋浦郷子が務めた。

谷本　雅之　東京大学大学院経済学研究科・教授
長　志珠絵　神戸大学大学院国際文化学研究科・教授
松沢　裕作　慶應義塾大学経済学部・教授
廣川　和花　専修大学文学部・教授
野依　智子　福岡女子大学国際文理学部・教授
倉敷　伸子　四国学院大学文学部・教授
満薗　　勇　北海道大学大学院経済学研究院・准教授
柴崎　茂光　東京大学大学院農学生命科学研究科・准教授（～ 2020 年度まで共同研究メンバー）
原山　浩介　日本大学法学部・教授（～ 2020 年度まで共同研究メンバー）
青木　隆浩　国立歴史民俗博物館研究部・准教授
樋浦　郷子　国立歴史民俗博物館研究部・准教授（2021 年度から共同研究メンバー）
吉井　文美　国立歴史民俗博物館研究部・准教授
横山百合子　国立歴史民俗博物館研究部・名誉教授
RA　五味玲子　千葉大学大学院

研究会および資料調査（個別調査を除く）は次のように実施した。

年月日	研究会	報告
2019年3月4日	準備研究会	○横山百合子・廣川和花：2020年歴博企画展示「ジェンダーからみた日本の歴史（仮）」プロジェクト　近代チームの現況 ○青木隆浩：歴博4室民俗「産業コーナー」の展示趣旨と研究経過 ○野依智子：石炭産業にかかわって
2019年7月14日	第1回研究会	○柴崎茂光：林業労働における女性の役割―屋久島などを事例に― ○松沢裕作：逓信省における女性雇員の判任官任用1906～1918―貯金関係部局を中心に―
2019年9月5日～11日	資料調査	資料調査：米国メリーランド大学ゴードン・W・プランゲ文庫，米国議会図書館，スミソニアン歴史博物館 参　　加：長・廣川・横山
2019年11月30日～12月2日	資料調査	資料調査：福岡（田川市石炭・歴史博物館）・佐賀（佐賀県立佐賀城本丸歴史館） 参　　加：長・野依・横山
2019年12月8日	第2回研究会	○原山浩介：「ハワイ―日本人移民の150年と憧れの島の成り立ち」展示の解説 ○満薗勇：戦後日本の小売業とジェンダー―女性自営業主の位置づけ ○青木隆浩：第5室産業展示の現状報告 ※一部は総合展示構築事業（5，6室リニューアル委員会全体会）と共同開催
2020年11月22日	第1回研究会	○谷本雅之：家事需要はどのように充たされていたのか―20世紀東京の場合を中心に ○松沢裕作：人びとはどのように恤救規則にたどり着いたのか―明治期群馬県の事例を中心に― ○横山百合子・松沢裕作・廣川和花：「性差（ジェンダー）の日本史」展示の解説
2021年3月8日	第2回研究会	○樋浦郷子：企画展示「東アジアを駆け抜けた身体」について ○大門正克：企画展示へのコメント――「問い」と「経験」を結び目にした考察を通じて―― ○横山百合子：「覚書　女性の労働・生活とジェンダーを日本近現代史研究で受けとめるために」を読んで――企画展示「性差の日本史」をふまえて ※基幹共同研究「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」と共同開催
2021年11月27日	第1回研究会	○長志珠絵：初期の労働省婦人少年局とメディアとしての紙芝居考 ○樋浦郷子：展示資料のなかの近代天皇制
2022年3月25日	第2回研究会	○横山百合子：「幕末維新期新吉原遊廓における遊女屋・遊客・遊女―高橋由一画「花魁」のモデル稲本屋小稲ほか遊女の書状を素材として―」 ○廣川和花：「救済」の一環としての明治40年法律第11号「癩予防ニ関スル件」

年月日	研究会	報告
2022 年 3 月 26 日	第 3 回研究会	○倉敷伸子：高度成長期を経た女性就労～香川県郡部を対象として ○野依智子：戦前・後における若松港・門司港の港湾労働と女性労働者

2　共同研究の成果

本研究では，具体的な産業に即した個別研究を通じ，以下の具体的な論点を見出すことが出来た。一つは，港湾や農村における女性労働の実態解明を通して，基礎的な労働組織の形態とそこでの女性労働の位置付けが産業技術のレベルによって変動し，その結果産業組織における性別の意味が変容していくこと，もう一つは，女子労働者やハンセン病患者など弱者として位置付けられた人びとへの政策や，性産業のような近世以来の連続と近代以降の新たな法的・社会的条件という断絶を併せ持つ分野の政策など，国家的な産業・労働政策の動向を考える場合にも，地域の社会的実態の分析が重要であること，の二点である。近代の産業・労働におけるジェンダーを検討するにあたっては，国家的な政策動向をふまえると同時に，男女比率・地域偏差，およびその職業の具体的な内容を通して性別役割の流動性や固定性に着目する必要があるのである。

また，前述の結論に至る経過で，より詳細には，次の点が明らかになった。

・鉱山労働：女性保護ための鉱夫労働規則（1924 年）が契機となり，家内労働の延長としての出来高払いを通例とする坑内労働から女性が除外され，炭鉱労働全体の性別役割分業を進めたという複雑な側面が存在した。さらに，炭鉱労働では，同じ労働にあたっても業務後の作業や家事負担が女性に付加された。

・公務員：珠算という技術を背景に，銀行と競合しつつ，逓信省貯金局への集中的な女性登用があった。官吏登用では，判任官に就業する女性の多くは単純な計算業務に従事し，昇進のしくみが存在せず，この点の戦後社会への具体的な影響も推定される。

・福祉や病：「恤救規則」（1874 年）を受給した人々には縁者から支援を拒絶された女性が存在するなど，現代の「自己責任論」を想起させるような現象が存在したほか，療養所内が所外の世界と同様に，厳密な性別役割やジェンダー観のもとにあったことなどからも，病気による困窮者への救済に際してのジェンダーの作用が推定できた。

・性産業：近世の身分制的枠組のなかで管理統制されてきた性売買組織は，近代初頭の芸娼妓解放令によって解体され，近代的な警察管理下に移行する。その具体的な過程を示す基礎的資料の収集に注力し，ジェンダーの視点から見たときの連続性と抑圧の質的変化について，その端緒を展望できた。

・仲仕（港湾荷役）労働：筑豊地域においては，港湾の荷役労働において男女ともに参加する様子が見られた。人数の統計が「男性□人，女性□人，朝鮮人□人」のような形で記されていたことが判明した。また同地域の場合，多くは 10 人前後の組に少数の女性が混じって働く形態を取るが，労働組織とそこでの労働内容や分担関係の具体的実態解明により，港湾労働におけるジェンダーや民族というファクターがいかなる意味をもったのかが明らかになることが予想された。

参加者による代表的な刊行物の例を一部挙げれば次のとおりである。

・国立歴史民俗博物館展示プロジェクト編『新書版性差（ジェンダー）の日本史』集英社インターナショナル，2021年
・谷本雅之「書評 石井寛治著『資本主義日本の地域構造』」『社会経済史学』87（2），2021年
・長志珠絵「紙芝居の発展史 特別編 労働省婦人少年局作成の「紙芝居」」『子どもの文化』53（6），2021年
・松沢裕作『日本近代社会史：社会集団と市場から読み解く 1868-1914』有斐閣，2022年
・廣川和花「ハンセン病史研究の新地平を切り拓く 本書の意義と課題（二〇二〇年一一月例会療養所における「自治」の経験とその射程を問う：松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』を素材に）」『歴史科学』247，2021年
・倉敷伸子「書評 岩島史著『つくられる〈農村女性〉：戦後日本の農村女性政策とエンパワーメントの物語』」『歴史評論』862，2022年
・倉敷伸子「共同的記憶がつくる「民主主義」」大門正克・長谷川貴彦編『「生きること」の問い方：歴史の現場から』日本経済評論社，2022年
・満薗　勇「ヒーブ（HEIB）の日本的展開をめぐって：消費・ジェンダー・企業社会（特集 家政学の思想）」『現代思想』50（2），2022年
・樋浦郷子「帝国日本の清潔と清潔感」国立歴史民俗博物館・花王株式会社 編『〈洗う〉文化史：「きれい」とは何か』吉川弘文館，2022年
・横山百合子「遊廓の明治維新―身分とジェンダーの視点から―」『人民の歴史学』231，2021年
・横山百合子「東京の明治維新―錦絵にみる町方住民の意識と維新政府の統治」『経済史研究』24，2021年

3　課題

以上の個別的な成果の蓄積により，ジェンダー視点にたつ労働分析において，労働組織と労働内容の具体的な解明の重要性が明らかになった。今後，民族やジェンダーの視点をふまえた産業・労働の分析においては，労働組織とその労働内容および組織内の分担関係の具体的な実態解明が必須であり，他の労働分析においても援用すべき重要な視点として位置付けたい。

また，国立歴史民俗博物館総合展示構築事業による第五展示室全体と第六展示室の一部についてリニューアル計画が進行中であるため，次のように具体的に本共同研究の成果を組み込むための提言を行う。

・近代日本における産業と労働全般：現在の総合第五（近代）展示室の「紡績工女から製鉄工夫へ」という単線的描き方を改め，都市ではなく農村社会に残って生きる人びとの実態や，鉱山労働において両性が労働に従事してきたという歴史的経緯などをふまえて描きなおす。
・病者の近代：戦争への動員の前提として身体の平準化が求められたことについて，「基準」からこぼれ落ちる存在をハンセン病者のありように即して，ことに徴兵検査で期待され内面化された「男らしさ」との関連から描く。
・その他：ジェンダーと皇室の表象，芸娼妓解放令，軍隊と遊廓を含む地図など新しい資料の展示

および解説の更新を行う。

横山百合子（国立歴史民俗博物館名誉教授）
樋浦郷子（国立歴史民俗博物館研究部）